日本宗教学会とアメリカ宗教学会

交流事業の反省と展望

渡邉　学
WATANABE Manabu

はじめに

南山宗教文化研究所は、日本を中心とするアジアの宗教の研究機関として 1974年に設立された。*Japanese Journal of Religious Studies* やさまざまな英文のシリーズ、諸宗教対話関係の南山シンポジウムのシリーズ、日米をはじめとする各国語の単行本などの出版活動をするとともに、日米の東西宗教交流学会や「現代社会における諸宗教の役割」研究会（CORMOS）、アジア地域の Inter-Religio などの場を中心として諸宗教対話の実践を長年行ってきた。

本研究所の従来の活動の特徴は、比較的限られた研究者と密接な協力関係を結んで、研究をめぐる対話などの進展を求めてきたことだろう。そのため、日本宗教学会やアメリカ宗教学会（American Academy of Religion [=AAR]）のように、数千人規模の学会の活動に積極的に貢献するよりも、日本の東西宗教交流学会やアメリカの Society for Buddhist Christian Studies、東アジアの Inter-Religio などのように、少人数の人々の間の親密で豊かな交流に活路を見いだしてきたように思われる。

本研究所が全国規模の学会に地歩を占めるようになったのは、井門富二夫日本宗教学会元会長（会長任期1996–1999）との交渉が大きな意味をもった。当時の所長ジェームズ・ハイジックは、井門会長と話し合って、近い将来、南山大学で年次大会を開催するだけではなく、南山大学の特質である国際性を発揮するとともに、個別発表だけの部会だけではなくパネル・ディスカッションの部会を設ける可能性を打診したのである。1999 年は私たちにとって特別な年であった。南山大学はちょうど 1999 年に 50 周年を迎え、また、南山宗教文化研究所は 25 周年を迎えることになっていた

からである。そして、このような特別な年であったからこそ、南山大学の協力を得て特別な予算を編成することも可能になったのである。

国際シンポジウム「宗教研究の新たな動向」

こうして、南山宗教文化研究所では、日本宗教学会 1999 年南山大学開催を想定して、特別なプロジェクトがさっそく進行しはじめた。ハイジック所長（当時）、スワンソン所員、奥山研究生（現所員）の 3 名が 1997 年 11 月にサンフランシスコで開催されたアメリカ宗教学会年次大会に参加して、バーバラ・デコンチーニ事務局長と交渉に当たった。スワンソン所員は、この問題を話し合うため、ワバッシュ・カレッジでレイモンド・ウィリアムズ AAR 理事と相談したところ、同理事は AAR 国際委員会と接触して同委員会を通じて準備することを勧めた。翌春、同所員はアトランタで開催された国際委員会にオブザーバーとして特別に参加し、当時の国際委員会委員長ジェイコブ・オルポナ（カリフォルニア大学デイヴィス校）やローレンス・サリヴァン（ハーヴァード大学世界宗教研究センター）委員らと交渉した。さらに、1998 年にオーランドで開催された年次大会には、スワンソン所員と私が参加し、マーガレット・マイルズ会長とローレンス・サリヴァン元会長と直接交渉を行って、ようやく AAR 側の人選にこぎ着け、1999 年の国際シンポジウムの素案が具体化したのである。

このように、両学会の交流事業を具体化するまでにはその前提として多大な国際交渉過程があったのだった。

1999 年には日本宗教学会年次大会が南山大学で開催され、その初日に記念講演に代えて、国際シンポジウムを開催し、AAR からマイルズ会長、サリヴァン氏、ダヴィド・カラスコ氏を招聘し、日本側からは土屋博、竹沢尚一郎、金井新二の 3 氏の参加を得て、会場に集まった 300 名の聴衆とともに、「宗教研究の新たな動向」というテーマで議論が展開されたのであった。その際、私は司会を務めさせていただいた。なお、発表原稿とレスポンスの原稿をあらかじめ事務局で集め、日本語と英語の対訳の付いた冊子を作成して、当日配布した。こうすることによって、日本語と英語の発表に関しては逐次通訳などの手間を省くことができるし、そのまま深い議論に入ることが可能になると考えたからであった。その代わり、ディスカッションに際しては同時通訳をつけた。こうして、国際シンポジウムは成功裏に終えることができたのである。

年次大会の三日目に私たちは両学会の今後の関係について懇談することができた。そこで、アメリカ宗教学会においてもぜひ日本の学者を集めて大会を開催したいという意見が出された。これは、両学会の橋渡しをした私たちにとって願ってもない流れであった。そして、その席上、私を含め、南山宗教文化研究所の所員もアメリカ宗教学会会員であることを明らかにし、今後とも協力を惜しまない旨、同学会の会長に伝えたのであった。

AAR側の働きかけ

1999 年秋にはマイルズ会長の指名によって私がアメリカ宗教学会国際委員会委員に参加することが決定した。その結果、私は、1997 年秋以来、2003 年の暮れまで 6 年間あまり、日米学会の国際交流に奔走することになったのであった。

私が 2000 年のはじめから参加した AAR 国際委員会は、委員長にメリー・マッギー

（コロンビア大学）を迎え、新たな活況を呈した。宗教学の国際化は AAR 自体の目標であったが、それを日本との交流を契機に、AAR の綱領自体の中に取り込み、2002 年のトロント大会以来、海外に焦点を当てて大会を開催することを提案し、理事会の了承を得たのは、マッギー委員長のイニシアティブによるものであった。要するに、私たちの日本からの働きかけがアメリカ宗教学会の国際化を促したと言っても過言ではないのである。

それから、後日わかったことであるが、私が日本に住みながら国際委員会委員に選ばれたのはきわめて例外なことであった。たとえ外国人が委員に選ばれることはあっても、アメリカ在住であることが基本条件であることがその後、判明したからであった。その意味で、私たちはマイルズ会長（当時）の決断に大きく依っていたといえるだろう。こうして、私は 2〜3 月の単独の国際委員会（アトランタ）と 11 月の各地の年次大会の際の国際委員会の年 2 回の委員会に 2000 年から 2003 年まで計 8 回、一度も欠かさずに参加したのであった。

アメリカ宗教学会がどこかの国の宗教研究に焦点を置いた大会を開催したことは、それまで一度もなかった。1999 年の日本宗教学会の働きかけを得て、今後、海外特集を年次大会にはじめるに当たって、まず日本特集を行おうというのが国際委員会の意向であった。

しかしながら、年次大会全体を日本特集にする前に、前段階として国際委員会主催の特別トピック・フォーラムに日本の学者を招こうということになり、私にその企画が任された。

特別トピック・フォーラム「オウム事件以降の宗教と社会」（デンバー、2001年）

そこで、日本特集のための布石として、2001 年のデンバー大会では国際委員会主催で日本の学者を招いて特別トピック・フォーラム、「オウム事件以降の宗教と社会」を開催したのだった。この年は周知の通り 9.11 の同時多発テロ、アフガン戦争、11 月初旬のニューヨークの航空機墜落事故という三重の苦しみを抱えていた。国際委員会委員の中には米国内に居住していながら、アメリカの航空会社の安全に対して失望したとの理由で参加を取りやめた者がいたほど、事態は深刻だった。

このような状況の下でこの企画に参加をしてくださった方々には感謝しても感謝しきれないほどである。私の司会のもとで、日本からはマーク・マリンズ、ロバート・キサラ、櫻井義秀の各氏、北米からはキャサリン・ウェッシンガー（ロヨラ大学（ニューオーリンズ））、アーヴィング・ヘクサム（カルガリー大学）の両氏の参加を得た。宗教とテロリズムが問題となった絶好のタイミングであったため、多くの聴衆を集め、活発な議論を展開した。このような問題が生じたときに社会がどのように変容するかということは、アメリカの学者が身をもって感じていたことであり、日本の学者は、6 年前から日本社会の変容をつぶさに観察していたのであった。

日本特集に向けて

その後、2002 年に日本特集を行うことが国際委員会の同意事項になった。しかしながら、同年の大会はカナダのトロントで開催されることを鑑みて、同年の大会は、カナダ特集とすることが決まった。さらに、1年

後の 2003 年はアメリカ宗教学会本部が置かれているアトランタで開催される予定だったので、それだけ本部の意向が通りやすいことから、日本特集をするのに絶好であると考えられたのであった。

私は、2002 年 12 月発行の『宗教研究』(334号)でアメリカ宗教学会年次報告をするとともに、アメリカ宗教学会がどのような部会やグループから構成されているかについてくわしく報告した。そして、南山宗教文化研究所では、2004 年 1 月に 2 回、有志のためにアメリカ宗教学会に発表申し込みをするためのガイダンスを開催したのであった。

これには延べ 30 名近い参加者を得て、パネルの構成について説明したり、参加者の中でパネルを構成したりすることができ、有意義な情報交換となった。これらのガイダンスの参加者の中から、実際に発表が認められた人々が出ることとなった。

「日本の学者と学問」特集(アトランタ、2003年)

そして、2003 年 11 月 22〜26 日の 5 日間、アメリカ合衆国ジョージア州アトランタでアメリカ宗教学会年次大会が、例年通り、聖書文学会(Society of Biblical Literature)と合同で開催された。アメリカ宗教学会は会員数約 9,000 名の大規模学会であり、今回も参加申込が 8,000 あまりあった。今回の年次大会は「日本の学者と学問」特集であり、日本からは 90 名近い会員の中から 40 名が参加した画期的な大会となった。

アメリカ宗教学会は、南山大学で行われた 1999 年の国際シンポジウムの返礼として、島薗進会長をはじめとして 3 名を招待し、アメリカ宗教学会のスイートルームで昼食会を開催し、島薗会長に記念品を贈呈して謝意を表した(pp. 31–32の写真参照)。アメリカ宗教学会を代表して歓迎のスピーチをしたメリー・マッギー国際委員会委員長は、今回の日米学会の交流が日本宗教学

会のイニシアティブによって行われたことを公に認め、それが今後のアメリカ宗教学会の国際交流のモデルとなるだろうと、日本宗教学会の働きかけを高く評価したのであった。同委員長は、井門富二夫元会長のもとではじめられた日本宗教学会の国際化プロジェクトの重要性を指摘し、今後とも両学会が協力関係を保つことを強く希望した。このような発言は、2005 年の国際宗教学・宗教史会議での再会を示唆するものであった。また、島薗会長は、アメリカ宗教学会の好意に応えるとともに、同じく 2005 年の国際会議への参加を強く求めた。さらに、私はかの開催地ではあくまでアメリカ宗教学会の主宰者側に立っているという意識があったにもかかわらず、同学会国際委員会委員を4年間務めた私に対しても、慰労の意味を込めて記念品が贈呈されたことは、長く記憶に残る思い出であった。

今大会の日本特集の目的とパネルの参加状況

さて、今回の日本特集には、大きく分けて 2 つの目的があったと言える。1 つは、日本の研究者を中心にしたパネルを開催することと、もう 1 つは、日本の研究者をさまざまなパネルに参加させ、日米学会の交流を積極的に図ることであった。また、日本人の研究者を含まなくても、日本をテーマにしたパネルも開催された。これらのパネルは、全部で 12 に及んだ。

発表者やレスポンス、司会などの参加を含めて、これらパネルを時系列的に列挙すれば以下のようになる（日本人か否か、本学会員か否かにかかわらず、在米の日本人も含めて広い意味で日本からの参加者を発表順に敬称略を略して列挙する。漢字のわからない名前は便宜上カタカナで表記した）。また、「 」の題目は発表タイトルではなく、パネルのテーマを表し、〈 〉はパネルの主体となったセクションやグループなどを表す。紙数の関係で発表題目は残念ながら省略させていただいた。

11 月 22 日（土）

〈日本宗教グループのパネル〉
「日本の社会と宗教に関する近年の研究」
ミヤモト・ユキ
〈宗教哲学セクションと神学・大陸哲学グループの合同パネル〉
「西洋思想と京都学派思想の対話」
鶴岡賀雄、ジェームズ・ハイジック
〈批判理論と宗教に関する言説グループ〉
「コミュニケーション、公共の場、世俗性、現代文化の探究」
堀江宗正

11 月 23 日（日）

〈国際委員会主催特別トピック・フォーラム〉
「日本の文脈における宗教研究」
島薗進会長、野村文子、林淳、中野毅、ポール・スワンソン、渡辺学（司会）（pp.34-35の写真参照）。
宗教における比較研究セクション
「神話理解――カテゴリー、論争、異文化論的関心」
山中弘、木村武史
キリスト教の歴史セクション

「日本のキリスト教――葛藤する経験」
マーク・マリンズ（司会）、ドロテア・フィルス、東馬場郁生、ミラ・ゾンターク、マツオカ・フミタカ
〈日本宗教グループ〉
「日本の宗教刷新運動における真正性のディスコースの再検討」
マツバラ・カクジュ
〈芸術シリーズ／映画部門〉
「映画「ディスタンス」の上映と是枝監督との懇談」
是枝裕和監督、ポール・スワンソン（司会）、奥山倫明*

*南山宗教文化研究所のスワンソン、奥山倫明両氏の企画によって国際交流基金の援助を得て映画監督の是枝裕和氏を招聘し、同監督作品の「ディスタンス」の上映会を開催するとともに同監督を囲んだ懇話会を催した。この上映会にも70名ほどの観衆が集まり、上映後は、作品の背景、製作の意図、方法論等について活発な議論が繰り広げられた（p.36の写真参照）。

11 月 24 日（月）
〈日本宗教グループと新宗教運動グループの合同パネル〉
「日本の新宗教運動の広報と成長戦略」
ロバート・キサラ（司会）、ベン・ドーマン、森下三郎、渡辺学、櫻井義秀
（pp.32-33の写真参照）
〈今日の東アジアにおける宗教・倫理・社会協議会〉
「一神教対多神教か？――宗教と環境倫理に関する東アジアの見解」
澤井義次、小原克博、クラウス・シュペンネマン、嵩満也、ランジャナ・ムコパディヤーヤ
〈アジア系北米人の宗教・文化・社会グループ〉
「19世紀末と20世紀初頭の日系米国人移民と宗教」
守屋友江、ブライアン・マサル・ハヤシ
〈国際委員会と宗教研究の文化史協議会共催の特別トピック・フォーラム〉
「近代への応答――仏教に関する日欧の学問間の相互作用」
下田正弘、佐々木閑（急用でペーパーのみの参加）

このように、パネル参加者は延べ 30 名を超えている。

また、これらのパネルでは、日本の学会とも縁の深い多くの方々が協力してくださった。ここで可能なかぎり学会プログラムの登場順に名前を挙げれば、ジェームズ・

フォード氏（ウェイク・フォーレスト大学)、ポーラ・アライ氏（カールトン・カレッジ)、ルーベン・アビト氏（サザン・メソディスト大学)、遊佐道子氏（ウェスタン・ワシントン大学)、ジョン・マラルド氏（ノース・フロリダ大学)、トマス・カスリス氏（オハイオ州立大学)、ウィリアム・ペイドン氏（ヴァーモント大学)、マーク・マックウィリアムズ氏（セント・ローレンス大学)、ゲイリー・エバソール氏（ミズーリ大学)、イアン・リーダー氏（ランカスター大学)、メリー＝エヴェリン・タッカー氏（バックネル大学)、ダンカン・ウィリアムズ氏（カリフォルニア大学アーヴァイン校)、ジョン・マクレー氏（インディアナ大学）といった方々がパネルの司会、レスポンデント、発表者などとして積極的に関わってくださった。

今回の日本特集でもっとも重要であったのは、国際委員会主催の特別トピックパネル「日本の文脈における宗教研究」であった。これは本来、1999 年南山大学で開催された国際シンポジウム「宗教研究の新たな動向」に対応する今回の特集の核をなすものであった。このパネルは、11 月 23 日日曜日の午前九時という早朝の時間帯にもかかわらず、ロバート・オーシ現会長、マーガレット・マイルズ元会長をはじめとしてほぼ満室の 60 名以上の聴衆を集めて行われた（pp.34-35の写真参照)。

まず、マッギー国際委員会委員長から日米両学会の交流事業の概略が説明され、次に、島薗進日本宗教学会会長が挨拶につづいて、日本の宗教学史の一端を紹介した。

私は、コーディネイターとしてパネルの趣旨を以下のように説明した。日本の宗教研究は、1905 年に宗教学講座が東京大学に設置されたときにはじめて制度化された。西洋とは異なり、日本の宗教研究は、キリスト教神学の背景やそれに対する応答の形では発達してこなかった。それではいったい、それはどのようにして展開したのか。日本の社会文化的環境はその発展にどのような影響を与えたのか。宗教学は、仏教学や他の学問領域や西洋の学問とどのように関係してきたのか。概して宗教研究の分野に対する日本の独自な貢献はあるのだろうか。本パネルは、日本の宗教学の領域を振り返り、宗教学の国際化の議論を論ずるためのフォーラムを提供する試みである。

パネリストとしては、第 1 に、野村文子氏が「日本の文脈におけるジェンダーと宗

教」と題し、自己紹介として同氏の研究史の紹介を行ってから、最新の研究（Kawahashi Noriko and Kuroki Masako, eds., “Feminism and Religion in Contemporary Japan,” *Japanese Journal of Religious Studies,* Fall 2003, vol. 30, No. 3–4）を簡潔に紹介し、当該論文に当たることを聴衆に勧めた。

第 2 に、林淳氏が「近代日本の仏教学と宗教学」と題し、近代日本の大学制度の展開をたどるとともに、このような制度的基盤が仏教学と宗教学に与えた影響を検討した。氏によれば、日本の近代仏教学は、大正期に帝国大学にインド哲学の講座が確立されたときにはじまり、その後、宗門大学が設立されたのであった。そして、日本の文脈では、宗教学は、仏教以外の宗教を対象とするものとみなされた経緯があったとのことである。このような日本の宗教学の特異性は、フロアの関心を誘い、いくつもの質問が寄せられた。

第 3 に、中野毅氏が「科学か、それとも人文学か――日本における経験科学としての宗教研究の発展と課題」と題して発表を行った。その発表において中野氏は、まず日本の宗教学が東京帝国大学に講座として開設された時以来、近代「科学」として認識されていた事実から論を進め、その結果、日本の宗教学は、(1) 社会諸科学との共同

や協力が欧米よりも密接に行われ、豊かな成果を一方では生みだしたが、(2) 他方で神学や宗学、宗教哲学のような規範的研究とも共存するという包括的な「ふろしき主義」とでもいえる特徴をもつ。(3) これは「科学としての宗教研究」を公式には標榜しつつも、その一方で、科学的方法への懐疑も当初から強くあり、科学なのか否かという方法論的アイデンティティーが定まっていないことを意味し、その背景には、(4) 日本の近代化・西洋化の必要から官学として輸入された結果、既存の宗教、またその神学や宗学との対決や緊張を欧米ほど経験しなかったこと、(5) 欧米の科学的研究では非近代的宗教として暗黙のうちに否定されてしまう日本の神儒仏を基盤とする伝統宗教や宗教文化を、欧米の個人主義的な「神への信仰」を核とする宗教文化と同じく、高度で価値のあるものとして評価しようという文化ナショナリズムが、同じく初期から存在したことによる、などを指摘した。

さらに、オウム真理教事件以降の日本の

宗教学は方法論的アイデンティティー・クライシスに強く直面しているのではないか、同様の課題は 9.11 以降のアメリカの宗教学においても見られないかなどの問題提起をして締めくくった。

その後、ウィリアム・ペイドン氏（ヴァーモント大学）とスワンソン氏がレスポンスを行った。ペイドン氏は宗教の比較研究の方法論に基づいて、あざやかな図式を用いて、欧米の視点と日本の視点のちがいを描き出してみせ、聴衆に強い印象を与えた。また、スワンソン氏は、きめ細かく発表に即して質問とコメントを行い、その後の議論の糸口を紡ぎ出した。

謝辞

以上の、学術プログラムに加えて、22 日夜には、熱気でいっぱいになるほどの参加者を集めて、ハワイ大学出版局と南山宗教文化研究所共催でレセプションが開催された。このレセプションには、今回の特集の参加者や協力者ばかりでなく、多くの日本研究者が一堂に会した。そして、在アトランタ日本領事館の代表もわれわれの招待に応じて参加した（p.37の写真参照）。

なお、ハワイ大学出版局には、レセプションを共催しただけではなく、書店販売の売り場の一角を提供して、日本の宗教学や国際宗教学・宗教史会議関係のパンフレットの配布に協力していただいたことに、ここで改めて謝意を表したい。

そして、アメリカ宗教学会には、ロバート・オーシ会長をはじめとして、バーバラ・デコンチーニ事務局長、ジョン・ハリソン事務局次長、メリー・マッギー国際委員会委員長に感謝したい。彼らの積極的な後押しがなければ、今回のような盛大な大会を催すことはまったく不可能であったからである。

このように、今回は日本からの多数の参加者を得て、とてもすばらしい大会に盛り上げることができた。参加者のだれもが日米学会交流の歴史的瞬間を実感し、感慨を新たにしたことは疑いがない。それほどまでに成功が実感できた大会だったのである。

最後に、日米の学会交流の糸口をつけてくださった日本宗教学会元会長の井門富二夫氏、想像を絶する多忙な状況の中で参加してくださった現会長の島薗進氏、撮影の合間を縫って参加してくださった是枝裕和氏、一年間の研究出張中のトルコからかけつけてくださった同学会国際委員会委員長の小田淑子氏、そして、ここでそれぞれの名前を挙げることはできないが、積極的に参加してくださったり運営にご協力してくださったりした多くの方々、そして、私一人に責任を負わせるのではなく、1997年当時から研究所の重要課題として日米学会の協力事業に全力を挙げて取り組んできた南山宗教文化研究所の同僚の一人一人に心から感謝したい。

おわりに

このようにして、南山宗教文化研究所は、日本宗教学会やアメリカ宗教学会のような数千人規模の学会にも積極的にかかわるようになってきた。今回の日米学会交流プロジェクトによって本研究所のあり方が大きく変わったといえよう。

そして、これを機に、本研究所は、国際宗教学・宗教史会議第 19 回世界大会（東京大会）にも進んで全面的に協力をしてきている。今から振り返れば、アメリカ宗教学会との交流事業は、このための布石であったといっても過言ではない。

本研究所は、2003 年度から科学研究費補助金を得て、「宗教学の国際化推進のための研究機関の改革と交流に関する国際比較研究」を 3 年計画で推し進めている。日米の学会交流事業がさらに大きな広がりを持ち、欧米だけでなく、アジアやアフリカにおいても、さまざまな研究者や研究機関と交流し、ますます宗教学の国際化を推進できることを望んでやまない。

＊本論を作成においては、基本的には同じ趣旨の拙論「アメリカ宗教学会年次大会参加報告記――日本の学者と学問を中心にして」（『宗教研究』第 77 巻第 3 輯、338 号、2003 年、pp. 193–99 [727–33]）を拡充する意図で執筆されたため、同拙論から自由に引用したことをあらかじめお断りしておきたい。

日本宗教学会とアメリカ宗教学会交流事業関係年表

1997 年 10 月	井門富二夫日本宗教学会会長、南山宗教文化研究所で懇話会
11 月	アメリカ宗教学会（AAR）サンフランシスコ大会に所員3名が参加
1998 年 2 月	スワンソン所員が AAR アメリカ宗教学会国際委員会にオブザーバー参加
9 月	渡邉所員が新設の日本宗教学会国際委員会の委員に就任
11 月	スワンソン、渡邉両所員が AAR オーランド大会に参加
1999 年 9 月	日本宗教学会年次大会を南山大学で開催。AAR の会長他、代表者を招いて、初日に国際シンポジウムを開催
2000 年　1 月	渡邉所員が AAR 国際委員会委員（当初の任期3年、2000–2002）に就任
2 月	渡邉所員がアトランタで AAR 国際委員会に参加

2001 年 11 月　AAR デンバー大会で国際委員会主催特別トピック・フォーラムを開催

12 月　渡邉「アメリカ宗教学会年次大会報告記」『宗教研究』330 号

2002 年 12 月　渡邉「アメリカ宗教学会年次大会報告記」『宗教研究』334 号

2003 年　1 月　渡邉の AAR 国際委員会員任期を 2003 年末まで1年延長

10 月　AAR 季刊紙 *Religious Studies News,* vol. 18/4 がインタビュー記事を掲載
"Beyond the Annual Meeting: International Connections Committee: An Interview with Manabu Watanabe, Professor of Religious Studies Nanzan Institute for Religion and Culture Nanzan University"

11月　AAR アトランタ大会で「日本の学者と学問」特集開催

12月　渡邉「アメリカ宗教学会年次大会報告記」『宗教研究』338 号

12月　渡邉、AAR 国際委員会委員の任期満了（2000–2002, 2003）

わたなべ・まなぶ
本研究所第一種研究所員